

宮崎市文化財調査報告書 第85集

い き め こ ふ ん ぐ ん  
史 跡 生 目 古 墳 群

保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅷ

— 生目21号墳の調査 —



2011

宮崎市教育委員会

表紙写真：生目21号墳完掘状況（前方部隅角部分より後円部を望む）

## 序

生目古墳群史跡公園が開園してから3年が経ちました。ボランティアガイド「遊古会」の皆様の精力的な活動を軸として、今日まで、市内はもとより、県内外からも多くの方にご来園いただいております。

本書に報告する生目21号墳は、永く円墳と認識されてきたものが、今回の発掘調査により前方後円墳であったことが判明した古墳です。また南九州固有の特異な形態のお墓である地下式横穴墓が、この古墳を取り囲むように10基以上も発見されました。まさに驚きの連続で、「掘ってみるまでわからない」と痛感した調査でした。

次年度以降、本書に報告する発掘調査の成果をもとに、この古墳の整備を行ってまいります。発掘調査を行った私たちが感じた「驚き」を、広く共有していただけるような整備を目指してまいります。

最後に、発掘調査、整備工事の実施にあたりご協力いただきました関係諸機関の皆様、御指導、御助言をいただきました諸先生方、そして発掘調査に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成23年3月

宮崎市教育委員会

教育長 二見俊一

# 例 言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い、宮崎市教育委員会が平成19年度から平成22年度まで実施した生目21号墳発掘調査の概要報告書である。
2. 現地調査は平成19年8月19日～20年3月31日、平成20年12月1日～21年3月31日、平成22年11月29日～23年3月31日の期間実施した。

### 3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

〈平成19年度〉

調査総括	文化財課長	野田清孝
主幹兼文化財係長	山田典嗣	
調査事務	主査	松崎留美
調査担当	主任技師	稲岡洋道
	嘱託	井上誠二
	〃	島井伸幸

〈平成20年度〉

調査総括	文化財課長	小掠 聖
主幹兼文化財係長	山田典嗣	
調査事務	主査	松崎留美
調査担当	主任技師	稲岡洋道
	嘱託	井上誠二
	〃	島井伸幸
	〃	鈴木弘子

〈平成22年度〉

調査総括	文化財課長	田村泰彦
副主幹兼埋蔵文化財係長	富永英典	
調査事務	主事	戸高佑輔
調査担当	主任技師	竹中克繁
	嘱託	井上誠二

整備指導	文化庁記念物課
	宮崎県文化財課

4. 掲載した図面の実測および現場写真の撮影は、稲岡、竹中、井上、島井、鈴木が分担して行った。
5. 掲載した図面の製図、図版作成および遺物写真撮影は竹中、井上が分担して行った。
6. 本書の執筆・編集は竹中が行った。
7. 地下式横穴墓の記述において、本書では堅坑より玄室に向かって「右・左」と述べる。
8. 本書の図で使用する方位記号はすべて真北を示す。
9. 本書に報告する内容については、現時点で検討途中のものが多く、将来刊行予定の本報告において、変更が生じる可能性もある。その場合、本報告の記載をもって正式なものとする。
10. 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会にて保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

# 本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 保存整備事業の概要	
第1節 調査に至る経緯	2
第2節 生目21号墳発掘調査の概要	2
第Ⅲ章 生目21号墳の発掘調査	
第1節 生目21号墳	4
第2節 地下式横穴墓	9
第Ⅳ章 総括	
第1節 生目古墳群における首長墓の変遷について	18
第2節 地下式横穴墓について	19

# 挿図目次

第1図 宮崎平野南部の主要古墳位置図	1
第2図 生目古墳群主要古墳分布図	3
第3図 生目21号墳調査前地形測量図および調査区配置図	4
第4図 生目21号墳平面・断面図	5
第5図 生目21号墳墳丘上覆土および周溝内堆積土土層断面図	7
第6図 生目地下式横穴墓第38号・第47号実測図	11
第7図 生目地下式横穴墓第43号実測図	15
第8図 生目古墳群における首長墓の変遷	18

# 写真図版目次

図版1 生目古墳群空撮写真	2
図版2 生目21号墳墳丘部分完掘時空撮写真	6
図版3 生目21号墳出土遺物	8
図版4 生目21号墳遺物出土状況	8

図版 5	生目地下式横穴墓第46号	10
図版 6	生目地下式横穴墓第38・47号	10
図版 7	生目地下式横穴墓第41号	12
図版 8	生目地下式横穴墓第41号出土遺物	13
図版 9	生目地下式横穴墓第42号	13
図版10	生目地下式横穴墓第43号	14
図版11	生目地下式横穴墓第43号玄室	16
図版12	生目地下式横穴墓第43号出土遺物	16
図版13	生目地下式横穴墓第20号	17
図版14	生目地下式横穴墓第44号	17
図版15	地下式横穴墓の検出状況	19

# 第 I 章 位置と環境

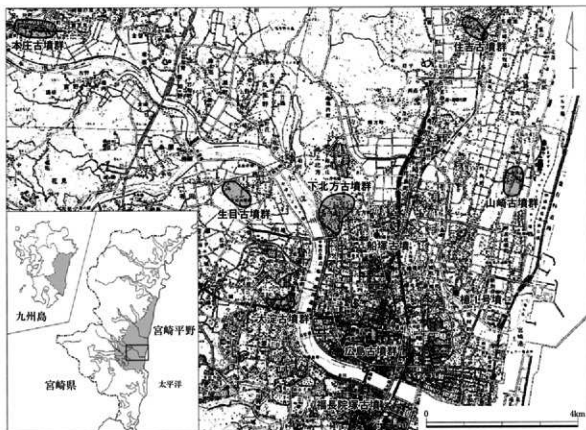
## 第 1 節 地理的環境

生目古墳群は、宮崎平野南部を東流する大淀川の右岸、南九州に発達する火山灰堆積による低平なシラス台地上に位置する。宮崎平野は南北に長い宮崎県の海岸部中央に広がり、そのほぼ中央を県下最大の河川である大淀川が東西に横断する。大淀川は下流において一旦、南へと大きく流れを変えた後、再び東に流れを変えて太平洋へと注ぐが、この川曲の地点に生目古墳群は位置している。

生目古墳群の載る台地は通称跡江台地と呼ばれ、宮崎平野の基盤層である宮崎層群（150～700万年前堆積）の上に「シラス」と呼ばれる始良入戸火砕流堆積物（鹿児島県始良カルデラ起源。24,000～25,000年前堆積）が10m以上堆積して形成される東西1.2km、南北1.3km、標高25～28mの低平な台地である。

## 第 2 節 歴史的環境

跡江台地上には縄文時代早期の「跡江貝塚」や弥生時代中・後期の環濠集落「石の迫第2遺跡」などが存在する。台地のほぼ全域において縄文時代の集石遺構や弥生時代の堅穴住居、土坑墓などが散見され、また古代の道路状遺構や中世の城館遺構なども存在している。更に近年まで畑地として利用されており、生目古墳群以前、また以後も、川に近接した低平な台地上において、連続とした人間活動の行われていたことが窺える。



第 1 図 宮崎平野南部の主要古墳位置図 (Scale : 1/100,000)

国土地理院 1/50,000地形図「宮崎」改変

## 第Ⅱ章 保存整備事業の概要

### 第1節 調査に至る経緯

生目古墳群は昭和18年に国史跡として指定を受けた。平成5年、宮崎市では本古墳群の整備を市制70周年記念事業として位置付け、平成5～7年度に古墳群全域においてトレンチ調査を行った後、平成10年に基本構想・基本計画を作成し、平成10年度より本格的な確認調査を開始した。平成17年に実施計画を作成し、平成18年度より整備工事を開始、平成20年4月に史跡公園として開園した。開園後も、平成29年度までの計画で、調査と整備を順次行っている。

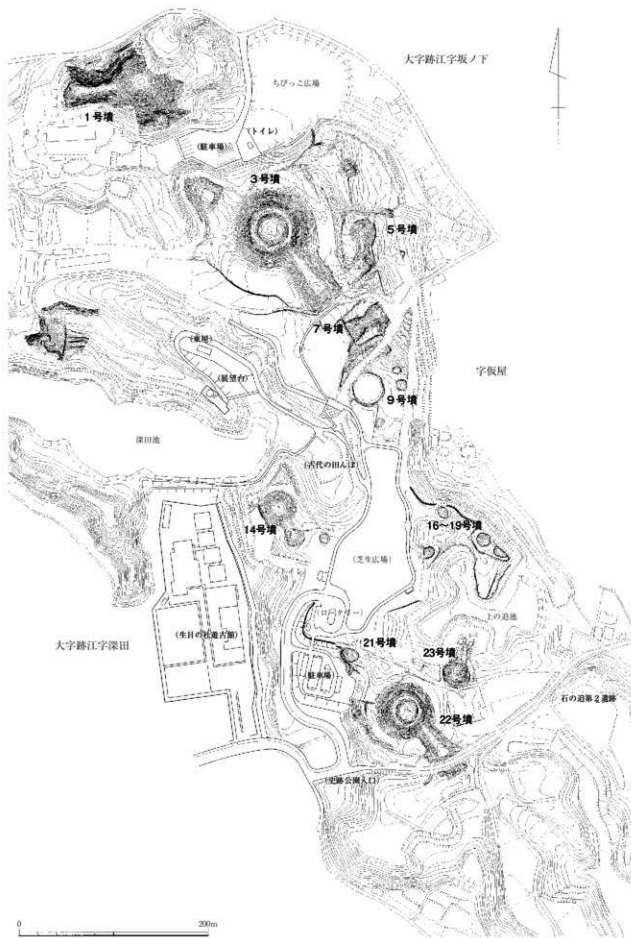
### 第2節 生目21号墳発掘調査の概要

生目21号墳は、昭和18年、円墳として指定された古墳であり、現況、円丘部分しか残っていない。しかし、平成14年度にトレンチ調査を行ったところ、円墳であれば環状に巡るはずの周溝が一部確認できず、さらに前方部かと思しき周溝の流れも確認されたため、前方後円墳である可能性が浮上した。これを受けて平成19・20年度の2年にわたって全面的な発掘調査を実施し、前方部が削平された前方後円墳であることが確認された。またこれに伴い、周溝内において地下式横穴墓が13基検出された。古墳に付随する埋葬施設であることから、その取扱いについて文化庁、宮崎県文化財課と協議を重ね、検出状態に留めているため、地下式横穴墓であると断定するには至れないこと、同様に基数の正確な把握が出来ないこと、また、今後同種の遺構が検出された場合に資すること等を目的として、13基のうち7基の地下式横穴墓において、発掘調査を実施した。



図版1 生目古墳群空撮写真





第2図 生目古墳群主要古墳分布図 (Scale : 1/4,000)

### 第三章 生目21号墳の発掘調査

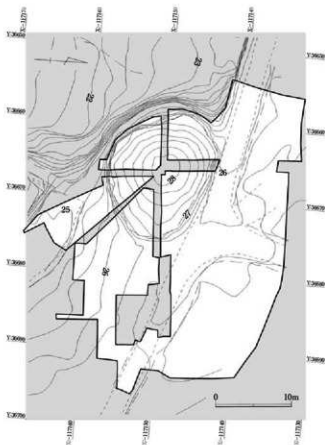
#### 第1節 生目21号墳

生目21号墳は墳丘長33m（復元値）、周溝部分を含めた全長41m（復元値）の、葺石を持たない小型の前方後円墳である。台地の南西縁部に位置し、後円部を西、前方部を東に向ける。後円部径20m（復元値）、同高5m（堆積土除去後）、くびれ部幅6.5m（復元値）、前方部幅15m（復元値）、同高は前方部墳丘が完全に削平されているため不明である。周溝内から集成編年2期後半～3期に比定される底部穿孔二重口縁壺が出土しており、4世紀前半の築造と考えられる。また次節に詳述するが、周溝内から13基の地下式横穴墓が検出されている。

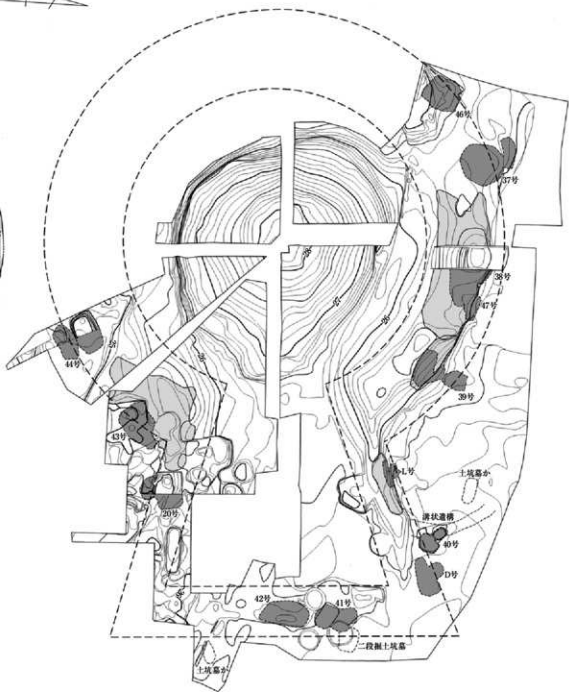
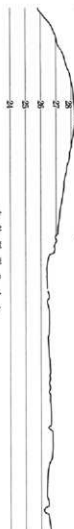
前章に述べたとおり、21号墳は本来、円墳として指定を受けた古墳であり、現況円丘部分しか残存していなかったが、平成14年度および19・20年度の調査により、前方部が削平された前方後円墳であることが確認された。

21号墳は台地の縁部に築かれた古墳であり、地山の堆積を観察すると、北から南へ、東から西へと落ち込んでいることがわかる（第5図）。墳丘は、地山であるアカホヤ土ないしその直上の黒ボク土を削り出した上に盛土を行っているが、地山削り出し部分と盛土部分との境もまた、旧地形と同じく南よりも北が、西よりも東が高くなっている。古墳構築時、墳丘部分に関しては、あまり大きな削平、整地をすることなく、盛土を行ったのであろう。盛土は、微量な

アカホヤ土やローム土の粒子が含有される褐色土による。墳丘表面に葺石は施されていない。調査は表土、堆積土の除去で留めており、墳丘の断ち割り等も行っておらず、また堆積土と墳丘盛土の様相が近似することから、やや確実性に欠けるが、アカホヤ土、ローム土の粒子が含有される土をもって墳丘盛土と解釈し、掘り下げを止めている。後円部墳丘断面のラインを見ると、斜面中に2箇所ほどテラス状になっているようにも見える部分があり、後円部三段築成かとも思えるが、あまり顕著ではなく、段築は無い可能性が高い。また墳丘表面の観察では、版築も認められない。後円部墳頂、6m弱ほどの範囲で、シラス土ブロックの含有が顕著な盛土が見られる。他の部分の盛土とはやや様相を異にしており、埋葬主体に関するものか、あるいは墳丘最上段だけ、他とは区別した構築が行われたのか



第3図 生目21号墳調査前地形測量図  
および調査区配置図 (Scale : 1/500)



■ 地下式横穴墓検出ライン      ※号数は地下式横穴墓  
 ■ 地下式横穴墓置土



第4図 生目21号墳平面・断面図 (Scale : 1/250)

と思われる。このシラス土ブロック含有土以外に、顕著な墓坑の掘り込み等は見出せない。なお、後円部の南西4分の1ほどの範囲においては、基底部上面から下が、周溝も含めて大きく崖状に削平されている。

前方部は基底部上面から上が完全に削平され、盛土部分は残っていない。また前方部南半は擾乱が多く、本来的な形状を残す部分はわずかしかない。主に北半における周溝の残存を参考にすると、前方部は所謂撥形で、端部（前方部前面）に近づくにつれ大きく開く形状を成す。当墳の周溝は西側（後円部側）が深く、東（前方部側）に行くにつれ浅くなっており、そのため前方部前面部分における周溝の残りは極めて浅い。これは、旧地形が北東に向かって上がっており、その分、大きく削平を受けたためであるが、そのため、前方部前面の周溝は、幅1m、深さ30cm程度の浅い窪み状にかろうじて残っているだけである。ただし、この箇所には地下式横穴墓第41号が構築されており、前方部端であることは間違いない。

また北東の前方部隅角部分では周溝が途切れている。当該箇所は旧地形のレベルが最も高く、古墳構築物が最も大きく削平を受けている部分であるため、単に周溝が削平されて残っていないだけである可能性もあるが、位置的に、周溝内に削り出された土橋とも考えられる。

古墳周囲はアカホヤ層下面まで削平を受けているため、周堤の有無は不明である。

後円部墳丘上の堆積土はほぼ表土であり、前方部墳丘上には本来の堆積が残っていないが、周溝内にはやや良好な堆積が残存している。周溝残存度の高い後円部北側の周溝セクションを見ると（第5図）、ローム土とシラス土の境付近を底面とし、壁面はほぼローム土内に収まる。底・壁面の直上にローム土と周溝内堆積土との漸移層が厚さ20cmほど形成され、その上に厚さ1mほどの黒色土が堆積し、さらにその上には10～13世紀に降灰したテフラを含む層が載っ



図版2 生目21号墳丘部分完掘時空撮写真

ている。なお後述する周溝内に造られた地下式横穴墓第38号は、周溝内堆積最下層のローム土と黒色土との漸移層を掘り込んで構築されている。

周溝内では次節に詳述する地下式横穴墓が13基検出されたが、それ以外にも、前方部や周溝、あるいは周溝外側など、地山であるアカホヤ層やローム層が露出した箇所では、弥生時代の土坑墓や、縄文時代の集石遺構なども検出されている。そもそも古墳自体がこれらの遺構を削平して構築されており、墳丘盛土内や、周溝堆積土の中に、これら遺構に伴うものであろう土器片や焼石が散見される。





図版3 生目21号墳出土遺物

**出土遺物** 墳丘上から土器細片が数点出土しているものの、遺物のほとんどは周溝内からの出土である。

図版3は二重口緑壺である。球形胴で、極めて丁寧な製作が行われている。破片の多くが揃った良好な接合状態であるにもかかわらず、底部に相当する部位が出土しなかったため、焼成後に底部が打ち欠かれた底部穿孔壺である可能性が高い。この個体とは別に、同じく球形胴でありながら、口縁部が大きく開き、充実気味の平底を持った二重口緑壺も出土している（図版

4）。ともに集成編年2期後半～3期（4世紀前半）に比定され、21号墳そのものの時期を表していると思われる。

他に、周溝内からは土師器高坏や小型丸底壺なども出土しているが、古墳そのものではなく、後述する、周溝内に構築された多数の地下式横穴墓に伴うものである可能性もあり、今後、整理作業を進めて行く中で、帰属関係の検討は慎重に行う必要がある。



図版4 生目21号墳遺物出土状況

## 第2節 地下式横穴墓

平成19・20年度の調査において生目21号墳の全面的な表土・堆積土の除去を行ったことにより、周溝内において多数の地下式横穴墓が検出された。最終的に、地下式横穴墓及びその可能性のある遺構は、検出段階において13基を数えた。全長33mの小型の前方後円墳の周溝内に存在する地下式横穴墓としては、極めて高密度なあり方と言えよう。また検出の状態から、この13基は、すべて周溝底面に堅坑を、周溝外側の立ち上がりの中に玄室を構築している、つまり古墳の外側に向かって玄室を持っていると予想された。

なお、上記の13基という数字は、あくまで検出段階でのものであり、確実な数字として挙げるものではない。地下式横穴墓は、その遺構の特性により、検出段階において遺構の特定が可能な場合と、それに至れない場合とがある。この遺構は本来、土中に玄室という空間を設けたものであるが、生目古墳群では長い年月によって玄室天井の崩落してしまっているものが多く、検出状態が一律ではない。また玄室天井の崩落度合いによって、検出面における検出のあり方も異なる。また遺体埋葬後における堅坑部分の埋め戻し土には、この地下式横穴墓そのものを掘削構築した際に出た、所謂排土がそのまま使用されることが多いが、外表施設的な意味合いを込めてか、埋め戻した堅坑上やその周辺にこの土が広げられている「置土」を持つものが生目古墳群では複数見られる。この置土が広範囲にわたり、別の地下式横穴墓の上にもまで及んでいる場合や、極めて近似した置土が隣接し合っている場合などがあり、置土の検出段階まででは、正確な基数の把握も困難である。

平成22年度に、13基のうち7基の地下式横穴墓について、発掘調査を実施した。実際の調査手順としては、調査対象とした地下式横穴墓のすべてにおいて、後々、遺構そのものから土層堆積状況の再確認、再検証が可能となるようセクションにかかる部位については現状のまま保存することとし、遺構検出面において堅坑、玄室（天井の崩落により、遺構検出面において玄室が認識できるもの）の双方に十字の軸を設定してサブレンチによる発掘を行い、その段階で土層堆積状況の確認、遺構平面形の推定が可能であれば、そこで調査を終了する。サブレンチにおいて十分なデータが得られない場合は、サブレンチの拡張、ないし軸の対角に位置する2箇所のみ完掘する。遺構の復元や研究に資するにおいて、完掘に近く調査を行うのが有益と判断されるものについては、十字ベルトを残して完掘する、という調査方針を立て、発掘調査を行った。

### 生目地下式横穴墓第46号

サブレンチで得られたデータにより復元すると、堅坑端から玄室奥壁までの全長2.3mの、平入り構造の地下式横穴墓である。堅坑は横方向に長い長方形の平面プランで、上端2.0m×1.3m、下端1.6m×0.95m、深さ65cm、羨門は堅坑床面、玄室床面に接した方形で、高さ60cm、幅1.25m、羨門軸の幅は60cm、玄室は平面楕円形で幅1.8m、奥行き50cm、高さは現状で40cmであるが、本来、玄室天井を構成していたと判断されるローム土が玄室内に厚く堆積しており、玄室天井は崩落により本来の形状を保っていないと考えられる。堅坑、羨門の境に



図版5 生目地下式横穴墓第46号

深さ3cm程の浅い溝が掘られており、板等、閉塞材設置のためのものと思われる。調査をした範囲において、出土遺物は皆無である。

竪坑、羨門ともに角がしっかりと造り出されているが、玄室は丸みを帯びた細長いパイプ状の形状で、奥壁と側壁の境界も明確ではない。竪坑と羨門は面と直線によって構成され、玄室は曲面と曲線によって構成されている、という印象である。

また竪坑に接し、シラス土のブロックを多量に含有した埋土を持つ人為的な掘り込みが、平面不整形な形で広がっており、地下式横穴墓に伴うものである可能性を考えサブトレンチを設定したが、シラス土を含有した埋土の下から10～13世紀降灰のテフラ（霧島高原スコリア）を含有した黒色土が検出されたことにより、地下式横穴墓に関連した遺構ではないと判断した。

#### 生目地下式横穴墓第38号・第47号

第38号は平成14年度のトレンチ調査の際、地下式横穴墓と認識することが出来ず、結果として縦断の断ち割りを行ってしまった遺構である。トレンチ内において、スロープ状の竪坑壁面や、直角に近い玄室奥壁の立ち上がりの形状が、生目古墳群内の他の古墳に見られる周溝の形状に類似していたことから、21号墳の周溝と誤認していたが、平成19・20年度の調査において広く検出を行い、また平成14年度調査トレンチのセクションを詳細に検討した結果、地下式横穴墓の誤認であったことが判明した。この段階でシラス土、アカホヤ土、ローム土など、地山

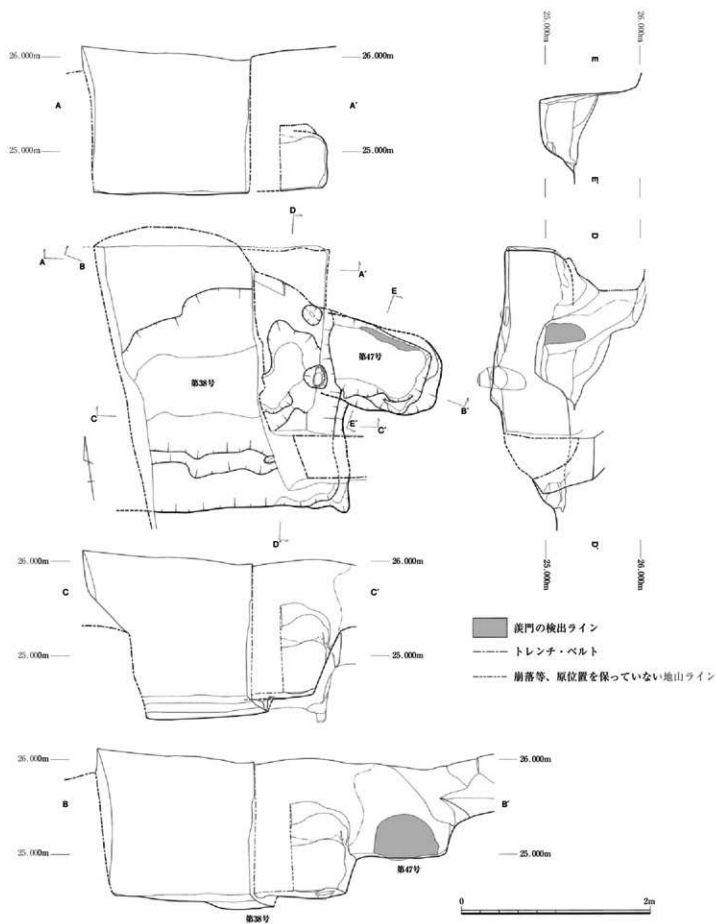


図版6 生目地下式横穴墓第38・47号

ブロックを多量に含有した置土が広範囲にわたって広がっていることが確認できたが、この置土の広がりにより、明確に地下式横穴墓の形状、基数等を把握することができない状態にもあった。

平成22年度の調査において、平成14年度調査のトレンチを挟んで、一方をそのまま保存し、一方をベルトを適宜設定して広めに発掘することとした。





第6図 生目地下式横穴墓第38号・第47号実測図 (Scale : 1/40)

第38号については、周溝壁面において周溝堆積土の上から堅坑が掘り込まれていることが確認でき（第5図）、21号墳築造後、一定期間をおいた後に第38号が構築されていることは間違いない。後述する地下式横穴墓第43号に見られるような掘り込み地業のようなものは見られなかった。

第47号は第38号に隣接する地下式横穴墓で、第38号の置土を掘り込み、堅坑と玄室の一部を壊して構築されている。また第38号の堅坑が、ほぼ21号墳周溝の底面で納まっているのに比して、第47号は、より周溝外側立ち上がりの中に入って構築されており、羨門側の堅坑壁の上半は、周溝立ち上がりの斜面をほぼ垂直に近く削ることによって成立している。これは、堅坑を深く掘らずに玄室空間を確保するための作業量の省略化と思われる。

第38号は半分を調査していないため、正確な測定値を示せないが、堅坑端から玄室奥壁までの全長2.8mである。堅坑と羨門の境に閉塞材設置のための深さ20cmのピットがある。堅坑は上端1.3m×2.3m以上、深さ70cm。羨門は天井が崩落しているため高さは不明であるが、幅は堅坑・玄室と同じである。玄室は2.4m以上、奥行き1.2m、高さは現状で60cmである。羨門袖部を削り出さず、堅坑、羨門、玄室がほぼ同じ幅で、平面的には堅坑と玄室が一体となった方形を成している。出土遺物はない。

第47号は堅坑部分のみの調査に留め、玄室部分は発掘していない。堅坑は横方向に長い長方形の平面プランで、上端0.9m×1.2m以上、下端0.6m×1.0m以上、深さ40cm、羨門は堅坑床面、玄室床面に接し、高さ50cm、幅70cmである。出土遺物はない。

一般に地下式横穴墓同士は切り合わないと言われており、このような地下式横穴墓の切り合いが確認されるのは、極めて稀有なことである。第47号堅坑部分の掘り下げ時には、第38号の玄室と誤認しており、両者の切り合い関係を示すセクションベルトを設定することができなかった。ただし第38号の置土部分の掘り下げを進める過程で、平面的に第47号堅坑のラインが見出せた（第38号の玄室のラインを示すものと誤認した）こと、および上述の両者の構築位置から、第38号が先に在り、のち第47号が38号の一部を壊して構築されたと理解できる。



図版7 生目地下式横穴墓第41号

#### 生目地下式横穴墓第41号

サブトレンチで得られたデータにより復元すると、堅坑端から玄室奥壁までの全長2.0mの、平入り構造の地下式横穴墓である。堅坑は横に長い楕円形で、上端2.7m×1.0m、下端1.8m×0.8m、深さ60cm、羨門は堅坑床面、玄室床面に接した方形で、玄室は平面楕円形で幅1.3m以上、奥行き0.5m、天井の一部が残存しており、高さは現状で30cmである。堅坑、玄室の床面に高低差はない。堅坑、



図版 8 生目地下式横穴墓第41号出土遺物

羨門、玄室ともに角が明確ではなく、玄室は丸みを帯びた細長いパイプ状の形状である。本遺構からは、多量の鉄製品が出土した。玄室床面より鉄斧、鋏先、刀子が出土し、また堅坑埋土中より刀子が出土し、また堅坑直上では、鉄鉾、鉄斧、鉄鎌が出土した。堅坑直上のものは墓前祭祀によるものであろう。

鉄鎌の年代観より、須恵器TK216並行段階（5世紀前半）と位置付けられる。また、本遺構は玄室奥壁側において、弥生時代の二段掘り土坑墓と切り合っている。

#### 生目地下式横穴墓第42号

セクション観察用のベルトを残し、ほぼ全面を発掘した玄室平入りの地下式横穴墓である。堅坑は平面不整形で極めて浅く、上端2.0m×1.0m、深さ20cmである。玄室床面は堅坑より一段下がって設けられており、非常に小型で、0.9m×0.4mの平面楕円形である。天井が残存しており、高さ25cmである。出土遺物はない。本遺構はその形態や堅坑の深さから、地下式横穴墓ではなく、21号墳築造以前の土坑墓の可能性もある。



図版 9 生目地下式横穴墓第42号

### 生目地下式横穴墓第43号

サブトレンチを入れた段階で特異な形態を持つことがわかったため、セクションベルトを残して遺構全体を発掘した。本遺構の位置は21号墳の左側くびれ部の周溝外側であるが、一帯は激しく攪乱されており、周溝立ち上がりもごく一部にしか残存していない。

羨門の袖部がなく、堅坑、羨門、玄室が同じ幅で造られており、堅坑と玄室を併せて正方形に近い平面形を成す。堅坑は横に長い長方形で、上端2.9m×1.6m、下端2.3m×0.7m、深さ60cmである。羨門部分には板閉塞のために幅20cm、深さ10cm弱の浅い溝が掘り込まれており、床面だけに留まらず、両側壁の壁面まで達している。上述のとおり、削り出された羨門袖部や、羨道などの構造はなく、単に玄室の開口部という印象である。玄室も横に長い長方形で、幅3.0m、奥行き1.0m、天井部分の大半は崩落しており、正確には高さは不明であるが、側壁で天井部分がわずかに残存しており、そのラインの流れから復元すると60cmである。玄室床面には縦方向の短い石列が5列並べられており、木棺を安置するための棺台か、もしくは木板を載せてスノコ状にしたのではないかと考えられる。玄室中央より右よりの地点で、両面穿孔の碧玉製管玉と滑石製白玉が出土しており、頭位を示していると思われる。

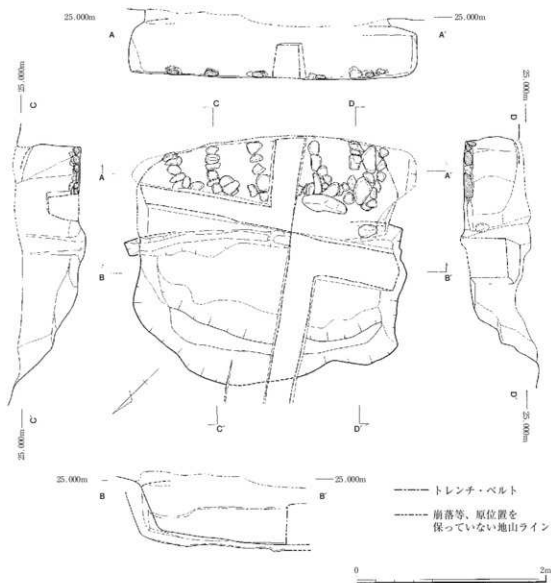
また第38号などと同じく、堅坑上において置土が広がっており、また堅坑下には、床面が不整形な掘り込みが確認された。ひし形の平面プランで、軸は地下式横穴墓と揃っている。範囲は地下式横穴墓の堅坑の位置までであり、玄室部分には及んでいない。これは周溝底面を範囲とし、外側立ち上がりの斜面にまで及んでいないということを示していると思われる。

この掘り込み内には置土に用いられているものと同種の土が入れられており、地下式横穴墓はその上から掘削構築されている。位置関係や埋土の近似性から、地下式横穴墓と一連のものであると思われ、地下式横穴墓の構築に先立って、整地のような行為を行った、掘り込み地業のようなものかと考えられる。



図版10 生目地下式横穴墓第43号

本遺構においては、追葬の行われた可能性がある。堅坑セクションにおいて、シラス土を主体とした埋土の上から、人為的な掘り込みの成されていることが認められる。埋土は置土や掘り込み地業に用いられているものと近似しており、他の土の含有が認められず、また堅坑埋土との間に他の層が形成されていないことから、置土の上から掘り込まれ、この掘り上げた置土の土を用いて、時を置かず埋め戻されたと思われる。この掘り込みの範囲は遺構の右側に偏っているが、玄室内の石列において、右側に若干の乱れが見受けられる。また閉塞溝の上にも石が1点あるが、この石は床面から10cm浮いた状態にあり、その上下の土は、この掘り込みの埋土である。以上より、遺構の右半において、再度の掘り方があったと思われる、即時に埋め戻しを行っていることから、追葬の可能性が高い。現状で、玄室内の羨門付近に、横方向の石列があるようにも見受けられるが、この一群は、この追葬に伴う閉塞の可能性もある。



第7図 生目地下式横穴墓第43号実測図 (Scale : 1/40)



図版11 生目地下式横穴墓第43号玄室

玄室右側床面において、両面穿孔の碧玉製管玉が1点、滑石製白玉が4点出土している。また遺構直上（堅坑と玄室の中間）において土師器の一群がまとめて出土しており、埋葬及び堅坑埋め戻し後の墓前祭祀に伴うものと思われる。須恵器TK73型式並行段階前後のものであり、遺構の年代を示すものと思われる。



図版12 生目地下式横穴墓第43号出土遺物

#### 生目地下式横穴墓第20号

遺構の半分近くが大きく攪乱を受けていたため、その攪乱坑を広げるような形で半蔵を行った地下式横穴墓である。その後、セクションベルトを残して堅坑部分は残りの半分も発掘を行ったが、玄室の残り半分については、セクションベルトを保持するために発掘は行わなかった。

玄室平入り型の地下式横穴墓で、堅坑は横に長い長方形の平面プランを持ち、上端3.5m×1.8m、下端3.4m×1.3mである。深さは現況で45cm、上部が削平を受けているが、周囲の状況から、21号墳周溝の底面部分は大きく削平を受けておらず、おおむね、遺構本来の深さもさほど隔たりはないと思われる。羨門及び玄室部分は半蔵しか行っていないが、中央と思われる部分から復元すると、玄室は横軸2.2m、縦軸0.8m、羨門の幅は90cm以上である。羨門、玄室ともに天井部が崩落しているが、玄室では右側壁に一部天井が残存しており、これから推定すると玄室の高さは60cmである。また用途不明ながら、玄室中央の床面および右半の床面において、幅30cm弱、深さ10cm、長さ70cmの溝が、縦方向に刻まれている。出土遺物はない。



図版13 生目地下式横穴墓第20号

#### 生目地下式横穴墓第44号

平成14年度調査のトレンチにおいて確認された地下式横穴墓であり、堅坑部分の半蔵は行っているが、玄室部分の調査は行っていない。

羨門の中心と思しき部分から復元すると、堅坑は横に長い平面長方形で、上端2.6m×1.7m、深さ90cmである。羨門は幅80cm、高さ40cmである。玄室部分は調査を行っていないが、検出面に天井の陥没した跡があり、この陥没痕跡から推定すると平入り型である。天井陥没の範囲は長軸2.4m×短軸1.3mで、おおむね玄室の規模を表出していると思われる。

堅坑埋土は、他の地下式横穴墓と同じくシラス土のブロックが多量に含有されたローム土を主体としている。もともと上部が削平を受けていたため、置土の有無は不明である。出土遺物はない。



図版14 生目地下式横穴墓第44号

## 第IV章 総括

### 第1節 生目古墳群における首長墓の変遷について

今回報告した生目21号墳は、周溝内出土土器より集成編年2期後半～3期に比定される。墳長わずか30m強の小型の前方後円墳が4世紀前半に位置付けられることによって、従来考えられてきた生目古墳群における首長墓の変遷過程について、見直しが必要となった。

生目古墳群は古墳時代前期に3基の100m級前方後円墳が築かれ、中期初頭の女狭穂塚古墳登場以前における、南九州における古墳時代開始期の盟主的首長系譜であったと理解されている。古墳群内には8基の前方後円墳があり、そのうち主要な首長墓について、1号墳(136m 集成編年1期ないし2期)→3号墳(143m 集成編年3期)→22号墳(101m 集成編年4期)→14号墳(63.2m 集成編年4期末)→5号墳(57m 集成編年5期初)→前方後円墳の断絶期→7号墳(46m 集成編年8期)という単系列の変遷として理解されている。うち22・14・5・7号墳の4基は発掘調査による出土遺物からの比定であり、1号墳は未調査、3号墳はこれまでの調査で時期比定の可能な遺物に恵まれていないため、墳丘形態からの比定である。上記に見られる前方後円墳の巨大化とそれに続く縮小化という、ある意味、典型的な変遷過程は、地方首長の栄枯盛衰を如実に表したものとして捉え易いし、また5世紀前半における前方後円墳の断絶期は、西都原古墳群における九州最大の前方後円墳女狭穂塚古墳の登場や、下北方古墳



第8図 生目古墳群における首長墓の変遷

群という同一地域内における別の首長系譜の築造開始にリンクしており、地域における古墳時代政治史を語る上でのモデル的ケースとも言える。

しかし、今回の調査により判明した21号墳の時期は、3号墳と重複することとなり、従来のシンプルな変遷過程の理解では説明できないことになる。1号墳、3号墳は出土遺物からの時期確定がなされていないので、21号墳の前後におさまる可能性もあるが、古墳群内でも最小規模の前方後円墳が、最大規模の1号墳・3号墳の前後ないし間に位置することにより、従来の巨大化から縮小化へという単純な変遷では説明できないことになる。

今後は、古墳群内において小規模前方後円墳や円墳が大型前方後円墳と併存するという重層的な理解や、あるいは台地北半に位置する群と南半に位置する群という複数系列の存在など、様々な可能性を考慮、検討した上で、調査、研究を進めていく必要がある。



## 第2節 地下式横穴墓について

21号墳の周溝内に造られた13基の地下式横穴墓のうち7基の発掘調査を行った。

サブトレンチを主体とした調査だったこともあるが、遺構内からの遺物の出土は7基中2基にしは見られなかった。そのうちの1基である第41号からは大量の鉄器が出土し、須恵器TK216型式並行段階に比定される。遺構そのものの構造としては、堅坑、玄室ともに不整形な形状を成し、特に平入り型の玄室は、壁面が平面よりは曲面に近く、横に長いパイプ状の形状である。一見、極めて新しい段階のものかと思いき構造であるが、出土遺物の年代で見れば、宮崎平野域における地下式横穴墓の初現期にあたる。橋本達也氏は初現期の地下式横穴墓には、玄室が家形を表現した家形系と、不整形で隅丸方形や小判形を呈する土塋系があるとしているが（橋本 2008）、第41号はまさにこの土塋系であろう。

第43号の玄室床面からは両面穿孔の管玉が出土している。遺構内出土の遺物は玉類だけであり、年代の絞り込みが難しいが、第43号には墓前祭祀に使われたと思いき大量の土師器が伴っており、これらから須恵器TK73型式並行段階前後という年代が得られる。5世紀前葉の地下式横穴墓ということは、現状で宮崎平野域における地下式横穴墓の初現例と位置付けられ、かつまた5世紀初頭のえびの盆地における地下式横穴墓の成立時期とも大きな時間差はない。

第43号は堅坑、羨門、玄室がほぼ同じ幅で、全体の平面形が正方形に近い形状を成し、羨門には閉塞材用の溝が掘られ、また玄室内には石列が配置されるという非常に特異な形態を成している。玄室内の石列は別として、類似した構造のものにえびの市小木原・蔵地下式横穴墓群中の蔵7号（九州前方後円墳研究会 2001における号数。調査時の遺構名はST1007）がある。蔵7号の築造年代は不明であるが、羨門部分に溝を持つことも共通する。特に、小木原・蔵地下式横穴墓群には4世紀末の横口式土坑墓、5世紀初頭の地下式横穴墓があり、同遺跡内で地下式横穴墓が成立したと考えられている。年代的な近似や、形態的類似性から、平野部における地下式横穴墓の初現例である生目43号は、小木原・蔵地下式横穴墓群から直接伝播した可能性が高い。

ただし、詳細な時期は不明であるが、生目古墳群内でも数基の横口式土坑墓が確認されており（宮崎市 1996）、地下式横穴墓の成立と他地域への伝播、そしてその背景については、今後、更に熟考する必要がある。

従来、地下式横穴墓はえびの盆地で5世紀初頭に成立し、前方後円墳不在の南九州内陸部で展開した後、5世紀中頃に宮崎平野域などの前方後円墳築造域に波及したと理解されていた。しかし近年の調査で生目43号や鹿児島県鹿屋市



図版15 地下式横穴墓の検出状況

の岡崎18号墳例（鹿児島大学総合研究博物館 2008）など5世紀前葉に位置付けられるものが確認され始めている。地下式横穴墓は、成立とほぼ同時に、宮崎平野域や肝属平野域などの前方後円墳築造域にも拡散していることは確実であり、同墓制もまた、地方における古墳文化の一要素として捉えるべきである。特に、玄室内の副葬品こそわずかではあるものの、明らかに他の地下式横穴墓とは一線を画した特殊な構造を持つ生目43号は、生目古墳群における前方後円墳の築造停止期に造られたものであり、墳丘を持たない首長墓の可能性も検討するべきであろう。

#### 【引用・参考文献】

- 鹿児島大学総合研究博物館 2008『大隈申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.3
- 九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集
- 橋本達也 2008「第2章 古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隈申良 岡崎古墳群の研究』第5部考察 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.3 pp.205-214
- 北郷泰道 2006「再論・南境の民の墓制 - 地下式横穴墓研究の現在 -」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第2号 宮崎県立西都原考古博物館 pp.1-12
- 宮崎市教育委員会 1996『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第28集

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん							
書名	史跡 生目古墳群							
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅲ							
巻次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	竹中克繁							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836							
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いきめこふんぐん 生目古墳群	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 おおいだびあと 大字跡 上江	45201	24-059	31° 56' 54" 付近	131° 23' 15" 付近	2007.8.19 } 2008.3.31 2008.12.1 } 2009.3.31 2010.11.29 } 2011.3.31	919.5	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
生目21号墳	古墳	古墳時代	古墳、地下式横穴墓		二重口縁壺、土師器、玉類、鉄器	全長33mの前方後円墳と、それを取り巻くようにして構築された13基の地下式横穴墓。		

宮崎市文化財調査報告書 第85集

史跡 生目古墳群

保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ

- 生目21号墳の調査 -

2011年3月

発行 宮崎市教育委員会

